ケインズは、「既得権益」と比較して、経済学者や政治哲学者の「思想」の力が過小評価されていると思っていたらしい。たしかに、『一般理論』全体が、「セイの法則」という過去の「亡霊」に支配されている古典派経済学の批判にあてられているのだから、彼が長い目で見れば思想の力がきわめて強力に働いていると考えていたとしても不思議ではない。

ケインズの死後も、死んだと思われていた貨幣数量説がフリードマンのマネタリズムとなって甦ったり、ケインズ流の総需要管理が市場原理主義という名の「自由放任」によって駆逐されたりしているので、「思想」というものが簡単には死なないことは誰にでも実感できるのではないだろうか。ケインズは思想史家ではなかったが、「思想」の本質を直観的につかむ才能には長けていたと思う。

だが、他方で、「既得権益」の力も決して侮れないものがある。『一般理論』の同時発見者として知られるカレツキは、完全雇用政策がケインズの構想通りに成功したとしても、それを葬り去ろうとする「既得権益」の力が働き出すことを見抜いていた。「完全雇用の政治的側面」（1943 年）と題された論文の中で、カレツキは、「完全雇用の維持によって生じる社会的・政治的変化」に注目し、いずれは「既得権益」（カレツキは「大企業と金利生活者の強力な同盟」と表現しているが）の力が完全雇用政策を挫折させることを見通していた。つまり、資本家と労働者との力関係が完全雇用の持続によって後者に有利に働くので、それを望まない「既得権益」の力がそれをつぶしにかかるというのだ。フリードマンやハイエクのような新自由主義の台頭を見事に予言している。ケインズとともにカレツキが、現代のポスト・ケインジアンに尊敬されているのもうなずける。

But apart from this contemporary mood, the ideas of economists and political philosophers, both when they are right and when they are wrong, are more powerful than is commonly understood. Indeed the world is ruled by little else. Practical men, who believe themselves to be quite exempt from any intellectual influences, are usually the slaves of some defunct economist.

「しかし、このような現在の気運は別としても、経済学者や政治哲学者の思想は、それが正しい場合にも間違っている場合にも、一般に考えられているよりもはるかに強力である。事実、世界を支配するものはそれ以外にはないのである。どのような知的影響とも無縁であるとみずから信じている実際家たちも、過去のある経済学者の奴隷であるのが普通である。」

（塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』ケインズ全集 7 巻、東洋経済新報社、1983 年、386 ページ）

これは『一般理論』の最終章に出てくる有名な文章である。「しかし、このような現代の雰囲気は別にしても」と始まる。「経済学者や政治哲学者の思想は、それが正しい場合でも間違っている場合でも、ふつうに理解されているよりもはるかに強力である」と。素直な文章である。次の文章は受身形で書かれているが、受身形は受身形で訳さなければならないという決まりはない。塩野谷氏も、ここは受身形で訳さない方がよいと判断している。さすがである。「実際、世界を支配しているのは、これ以外にほとんど見当たらない」でよいと思う。

次は「実務家」とあるが、彼らは「自分ではどのような知的影響からも全く免れていると信じているような」人たちと説明が続く。そのような実務家でも、「通常は亡くなっている誰かの経済学者の奴隷なのである」という。

* John Maynard Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, p.383.